

年少児集団保育に関する一考察

—保育所児と家庭保育児の比較から—

小 野 瑞 江

I はじめに

働く婦人の増加に伴ない要保育児童が200万人にも達したことが、昭和46年の自治省統計で明らかとなった。そのうち全国で保育所に入れず、「保育に欠けた」状態のまま放置されている幼児が、約90万人もいるという。とくに最近、年少児（3歳未満児）の保育要求が高まるなかで、昭和48年11月に出された中央児童福祉審議会の答申は、その考え方において従来となら変わりばえしないものであった。

答申は「乳児保育の拡充、障害児の保育の実施など、保育要求はますます多様化しつつある」と国民の保育要求を認めてはいる。しかしこれを「そのまま受け入れて、これに直ちに対応することは、必ずしも乳児の福祉を増進するとは考えられない」として、「家庭保育が最も望ましいという原則」を確認している。

このような家庭保育第一主義は、すでに昭和38年9月に同じ中央福祉審議会の答申で提起されている。それは「保育7原則」とよばれ、母親による家庭保育が最重要視されている。とくに2ないし3歳以下の乳幼児期においては、まず家庭で保育されることが原則であり、それが不可能なばあいにおいて「親密で暖かい養護が与えられるよう、処遇を手厚くする必要がある」と答申された。

これらの姿勢が保育施設の充実とその増加に大きく影響を与えているといえよう。その結果、「何はともあれ施設の増加を」と願わざるをえない大人の側からの要求と、それにブレーキをかける行政政策の貧困という谷間で、幼児自身の立場が置きざりにされることはないか。年少児をかかえた、働く母親である筆者自身を含めた共働き家庭の父母にとって、年少児保育は親の側からのみの必要にせまられたものであり、子どもにとってはマイナスの面が多いのでは、という不安がつきまとはなれない。

そこで、まず現在行なわれている年少児集団保育は、幼児の精神発達にどのような影響を及ぼしているかを検討することから本研究は出発した。

そのねらいは、

① 3歳未満の集団保育児と家庭保育児との精神発達のちがい。 ② それらのちがいを明らかにすることにより、よりよい集団保育のあり方を考察することにある。

II 文献的考察

家庭保育と集団保育について現在わが国に2つの流れがある。

その1つは、施設保育より家庭保育を重視する考え方である。これはイギリスの J. Bowlby²⁾の研究にねざしている。Bowlby は、『母性愛』は子どもにとってビタミンや蛋白質と同じく

不可欠のものであり、早期に『母性的愛情欠乏』を経験した子どもは、成長後『愛情のない性格』と呼ばれる一種の反社会的パーソナリティを示す」と述べた。とくに乳幼児を長時間母親から分離すると、その性格形成に大きなひずみをうむとして、言語発達のおくれ、情緒不安定、無気力、指しゃぶり、ロッキングなどさまざまなホスピタリズム徴候を挙げた。また M. Toman は松島富之助³⁾の紹介によると、乳児院、孤児院の子どもと、家庭保育児を比較し、前者が後者より劣っていることを次の4点で明らかにした。すなわち、(1) ことばのおくれ、(とくに1歳代以後のおくれが決定的) (2) 情緒反応のおくれ、(3) 運動機能のおくれ、(4) 感染による精神的退行現象、である。

Bowlby の研究を中心として施設保育児の欠陥が指摘され、日本では国の政策として集団保育より家庭保育が重要視されるようになってきたといえよう。

これにたいして守屋光雄⁴⁾は家庭保育児と施設児とでは、後者が保育条件や子どもの家庭環境にすぐれているばあい、顕著な差がみられないという調査結果を報告した。すなわち、津守真の「乳幼児精神発達診断法」によって団地内保育所児と団地内家庭児を比較したところ、0歳児のばあい、発達指数、運動、探作・操作、社会、生活習慣、理解・言語のすべてにむしろ施設児の方が得点がたかく、1歳児では発達指数を除いた他は施設児がすぐれ、2歳児では、運動、探索・操作、理解・言語の各領域でわずかに家庭児が上まわった。だが、とくに家庭児がすぐれている、という根拠はこの結果からはまったく出なかった。もちろん施設児といっても保育条件にめぐまれ、その家庭環境がよければあいに限られ、収容児に生育的(または遺伝的)負因があるうえに、保育条件が不十分な乳児院の子どもでは、さきの施設児や家庭児とに総合的に見てかなり劣っていることも同じ調査で明らかになった。ここから、従来施設児が家庭児に劣るとされてきたのは、守屋によれば、むしろ子どもの遺伝的負因や保育条件に原因すると考えられること、それゆえ目下の急務は(1)保育所(とくに乳児保育所)の増設、(2)保育所の量と質の拡充整備(……以下略)など、6点にわたる「条件」の拡充、整備にあるという。

又近藤薫樹⁵⁾は保育園の園長としての実験経験から、2～3歳児や乳児のばあひも子どもの全面発達を促すためにこそ集団保育の中で専門家によって教育をうけることの意義を強調した。

その他、秋田美子⁶⁾は「1～2歳児の保育」で、乳児保育は母親に育てられた場合と遜色ないのみか、未来の社会人として積極的なよきを与えられることを実践を通して示そうとした。

このように守屋や近藤らの集団保育を肯定し、その意義を積極的に主張しようとする立場が第2の流れといえよう。

なかでも注目すべきことは、最近とりわけ乳児保育を積極的にすすめている人達の間でその理論化もすすめられていることである。金田利子⁷⁾もそのひとりであるが、1乳児の1年間の発達過程を観察して「乳児も集団保育の場が与えられると対人交渉がみられる」ことを調べた。そのことから金田は、乳児集団保育を発達初期の大切な社会的知覚経験として重要視している。また清水民子⁸⁾は「乳幼児保育の基本構造」という論文のなかで、乳幼児保育のあり方を乳幼児期の発達の視点から再編成しなおそうと試みていることも新しい流れである。

これら第2の流れは、主に社会主義諸国における諸条件が整備されたもとの0歳児からの集団保育の実践から出発した。それが最近では、日本独自の新しい実践と理論を生み出す方向に努力が重ねられつつある。しかし一定の思想的背景のもとに国をあげて集団保育にとり組んでいる社会主義諸国の状況と、なかば行政に反対方向を向かわれている日本の国とでは、まだまだにも諸条件に差がありすぎる。そしてその貧しい状況の中でもとにもかくにも集団保育が

なされている。

筆者はその現実にたって、まず現状の分析から出発したいと願った。

Ⅲ 調査の実施

1. 調査対象

K市内私立保育園集団保育年少児……20名

- { 1年保育 (51年4月入園)
- { 2年保育 (50年4月より保育を受けている)

※以後名称を仮に1年保育児, 2年保育児として区別する。

K市内家庭保育児……10名

第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ表のような子どもたちであった。いずれも正常出産, 身体障害を持たない子どもたちである。なお両者の子どもたちの家庭は, K市内, 下町に近い地域である。K保育園における年少児1クラスの人数は24名。保母は, 保母歴10年以上1名, 3年が1名, 短大新卒1名の合計3名であった。

調査用紙の回収は20名(回収率およそ83%)であった。20名のうち1年保育児と2年保育児がそれぞれ10名ずつおり, それらにあわせて家庭保育児の調査数を10名とした。

2. 調査と観察の時期

調査: 1976年7月末～8月3日

観察: 1976年8月末～4日間(午前9時～12時)

保育は, 午前8時～9時20分; 登園および

表Ⅰ 調査対象児(1年保育児)

| 氏名 | 年令 | 父 | 母 | 学歴 |
|------|------|-------|---------|----|
| K.N. | 2:5 | 父(中卒) | 母(短大) | |
| K.A. | 2:5 | 父(中卒) | 母(中卒) | |
| M.M. | 2:10 | 父(高卒) | 母(中卒) | |
| S.K. | 2:5 | 父(高卒) | 母(中卒) | |
| F.T. | 2:11 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| F.T. | 3:0 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| M.U. | 2:6 | 父(中卒) | 母(中卒) | |
| T.S. | 2:11 | 父(高卒) | 母(高等看護) | |
| S.K. | 2:7 | 父(大卒) | 母(大卒) | |
| O.A. | 2:8 | 父(大卒) | 母(大卒) | |

表Ⅱ 調査対象児(2年保育児)

| 氏名 | 年令 | 父 | 母 | 学歴 |
|------|------|----------|-------|----|
| N.T. | 2:11 | 父(職業訓練所) | 母(中卒) | |
| S.M. | 2:7 | 父(中卒) | 母(高卒) | |
| I.M. | 2:7 | 父(高卒) | 母(短大) | |
| M.U. | 3:0 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| H.T. | 2:10 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| Y.K. | 2:9 | 父(大中退) | 母(高卒) | |
| O.H. | 2:11 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| E.Y. | 2:11 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| T.U. | 2:9 | 父(なし) | 母(中卒) | |
| N.T. | 2:8 | 父(大卒) | 母(大卒) | |

表Ⅲ 調査対象児(家庭保育児)

| 氏名 | 年令 | 父 | 母 | 学歴 |
|------|-----|-------|-------|----|
| M.O. | 2:9 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| T.N. | 2:9 | 父(中卒) | 母(中卒) | |
| K.R. | 2:8 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| H.S. | 2:7 | 父(中卒) | 母(高卒) | |
| M.Y. | 3:0 | 父(大卒) | 母(中卒) | |
| N.S. | 2:5 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| O.N. | 2:6 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| H.M. | 2:8 | 父(中卒) | 母(中卒) | |
| N.K. | 2:5 | 父(高卒) | 母(高卒) | |
| M.S. | 2:2 | 父(大卒) | 母(大卒) | |

自由あそび，9時20分～10時；おしっこ，おやつ，10時～11時；一斉保育，11時～12時；食事準備と昼食（保育園の都合で午後の保育は観察できなかった）。多少の時間的ずれはあるが，だいたいこのように進められている。

3. 調査材料

津守真式⁹⁾「乳幼児精神発達診断法」（0～3歳）

4. 調査手続

この精神発達質問紙は，母親と面接し，母親の観察にもとづく報告によって発達診断を行なうことを原則とする。しかしK保育園と筆者の都合によりそれが不可能であったため，説明の必要な項目に簡単な説明と例示をして質問紙を作成した。

質問紙は保育園を通して対象児に家庭へ持ち帰らせ，それを回収した。家庭保育児のばあいも同様の質問紙を母親自らに記録してもらった。

IV 調査結果とその考察

精神発達の各領域について1年保育，2年保育，家庭保育児別に平均と偏差値を出し，その結果を第IV表に示した。

保育所児と家庭保育児との発達指数（D・Q）を比較して，統計的には両者間に大差がみら

表IV 保育所児・家庭保育児に施行した乳幼児発達検査

| | 2年保育児 | | | 1年保育児 | | | 家庭保育児 | | |
|---------------|-------|--------------------|-------|-------|---------------------|-------|-------|--------------------|-------|
| | 人数 | 平均 | 偏差 | 人数 | 平均 | 偏差 | 人数 | 平均 | 偏差 |
| D・Q | 10名 | 96.5 | 14.89 | 10名 | 101.7 | 12.96 | 10名 | 104.6 | 14.97 |
| 運動 | 〃 | 67.3 | 1.921 | 〃 | 67.15 | 2.20 | 〃 | 67.35 | 1.196 |
| 探索・操作 | 〃 | 54.3 | 3.33 | 〃 | 55.5 | 3.122 | 〃 | 55.6 | 3.194 |
| 社会 | 〃 | 42.9 | 2.387 | 〃 | 43.45 | 2.678 | 〃 | 43.0 | 1.396 |
| 食事・排泄 生活習慣 | 〃 | 47.75 | 4.266 | 〃 | 47.1 | 3.821 | 〃 | 46.75 | 2.441 |
| 理解・言語 | 〃 | 30.1 | 2.429 | 〃 | 30.0 | 1.987 | 〃 | 27.5 | 2.419 |
| 年齢平均 | 〃 | 33.6 ^{ヶ月} | | 〃 | 32.35 ^{ヶ月} | | 〃 | 31.1 ^{ヶ月} | |

れない。しかし得点は保育所児より家庭保育児の方がやゝ高い。この傾向は守屋光雄の同様の調査（2歳児に限って）ともほぼ一致している。各領域別では「運動」「探索・操作」においては家庭保育児の得点がたかく，「食事・排泄・生活習慣」「理解・言語」においては保育所児の方がやゝ高くなっている。「理解・言語」に関しては，とくに基本的発音の学習，言語の獲得期にある3歳未満児では，大人との関係のいかに影響されやすいため，保母の側の意識的働きかけがなければその発達は遅れると考えられたが，当調査に限っていえば逆になった。なお守屋の調査では家庭保育児と保育所児は同点になっている。

社会の領域は保育所児と家庭保育児とに特別な傾向がみられない。

全体として，両者の発達状況に特徴的な傾向はみられなかったが，あえて指摘するならば，3歳未満児に関して保育所児は「運動」「探索・操作」の発達より，「食事・排泄・生活習慣」

や「理解・言語」の発達において順調であったといえよう。

以上の結果を領域別にさらに細かく検討してみたい。

(1) 「運 動」

ここでわずかに得点差のみられた項目は、「足を交互に出して階段をあがる」(36ヶ月)で、2年保育児>1年保育児=家庭保育児となっている。これは2年保育の子どもの方が多少年齢平均が高いことから得点の高い項目になりうるともいえる。運動能力という点では、遊具、一定の広さのグラウンド、など諸設備の整った保育所児の方が有利と考えられた。しかし3歳未満児ではまだ世界の広がりもそれ程大きくなく、諸設備を利用しての活動もそれほど多くない。したがって必ずしも特別の恩恵をうけているとはいえず、運動能力に影響を及ぼすほどの顕著な結果があらわれなかったものと思われる。現在の段階ではむしろ全体的には保育所児より家庭保育児の方に得点が高いという結果がでた。ただし、年齢が高まるにつれて保育所児の環境条件が有利に働くことも予想されよう。

(2) 「探索・操作」

「まりを受けとったり、投げたりを繰り返す」(21ヶ月)が2年保育児=1年保育児<家庭保育児となっている。保育所では、保母と子ども集団としての活動や接し方が多いため、1対1の関係で成立する項目は不利となる。しかし園の指導カリキュラムにあるような、「のりをつけてはりつける」(36ヶ月)は、2年保育児=1年保育児>家庭保育児となり、保育所児に有利である。また保育所児は、積み木、クレヨン、はさみ、色紙など、家庭の子どもより比較的早くから系統的に与えられると考えられるため、調査の時点では2年保育児=1年保育児=家庭保育児であるが、もう少し先の時点ではのびることも考えられる。

(3) 「社 会」

「電話ごっこでふたりで交互に会話ができる」(36ヶ月)に2年保育児=1年保育児>家庭保育児の差がみられた。3歳未満児でも保母や大人の適切な指導と刺激があれば育つ項目である。

また佐々木宏子¹⁰⁾によると、「どちらがよくできるか友だちと競争する」(54ヶ月)「禁止されていることを他の子どもがやった時、その子どもに注意する」(60ヶ月)などは集団生活の中できわめて早く育てることのできる項目であるという。その点に関して本調査では3歳以上の項目をとりあげなかったため明らかにされなかった。しかし、現在3歳になる筆者の長女はそれ以前より「○△ちゃんの方が早い」「そんなことしちゃいけない」などの言動が多いことに気づかされていた。これらは集団がよく組織された時には生かされるが、大人の適切な指導がない限り、子ども同志お互いの関係をマイナスの方向へ進め、集団が育ちにくいことに注目したい。

(4) 「食事・排泄・生活習慣」

基本的な生活習慣は、集団生活をしている子どもの方が早く形成されやすい。それは同年令の子ども同志の模倣によって刺激されることによる。ヴィゴツキー¹¹⁾のいう発達の最近接領域からの働きかけが発達を促しているといえる。ただし、「どんなに夢中になっていてもおもしろくない」(36ヶ月)は、1年保育児=2年保育児<家庭保育児となっている。この数字からのみの断定はさけたいが、保育所児の生活習慣の形成が、手がたりないための仕方なしの自立

であったとしたら問題である。

また「家族の茶わん、はしなどを知っていて並べる」(21ヶ月)「ふろで自分の体に石けんをつけて洗う」(21ヶ月)の項目は、ともに2年保育児<1年保育児<家庭保育児である。これは、共働きの多い保育所児の家庭では、子どもの成長の欲求をそのまま受け入れられず、母親自らが手早くすましてしまいがちな状況にあることも一因となって起ったものとみられる、

(5) 「言語・理解」

「いちいちなあにときく」(24ヶ月)「名前をきくと姓と名をいう」(30ヶ月)はともに2年保育児=1年保育児>家庭保育児で、保育所児に得点のある項目となっている。佐々木宏子の調査によれば、大人との1対1のコミュニケーションによってよりよく発達する項目は、やはり保育者の少ない集団生活の子どもに不利と述べられていて、本調査とは異なる点である。これは保育者の努力によって、個々の子どもから出された疑問、興味のひろがりがよく受けとめられ、集団生活が望ましい方向に進んでいくことを証明する項目でもある。また一般には保育所児の方が言語発達においては遅れがちであるといわれている。しかし本調査では逆の結果になった。これは本質問紙が、コミュニケーションとしての「言語」に中心がおかれ、思考、知識、発音などに関わる「言語」がとくに診断されていない故ではなかろうか。

V 年少児保育の問題点

年少児の集団保育でまず問題としてあがってくるのは、ひとりひとりの子どもに対して大人の側からの細かい配慮をおおいに必要とする時期に、年長児のカリキュラムに準じた内容で一斉に保育されることである。松田道雄¹²⁾は「集団の中で生活するということは、どんなにその集団が楽しいにしても、ある子どもにとっては精神の緊張を必要とする。3時間しか集団にいない幼稚園の子どもでも、あすはお休みだというと思ふ。集団には何らかの拘束があると思ふべきである」という。

このように集団自身が何らかの拘束を持つうえに、カリキュラムによって1日がこきぎみに時間でくぎられ、保育者に動かされる状況においては、とくに年少児ほど疲労が激しいと予想される。

保育中、何となく無気力でぼんやりしている子どもが目立ったことは、このような保育のあり方とも関係しているとはいえないだろうか。佐々木宏子もとくに年少児の集団のあり方について次のように述べている。つまり「子どもたちが集団の中でも意志表示ができるような段階にまで成長していれば、集団は非常によいものを多く生み出す。しかしまだその判断ができず、自分の意志表示も上手にできない子どものばあい、集団がよいものになるか、マイナスになるかは、ひとえに指導者(大人)の力量にかかっている。……(途中省略)。3歳未満の子どもの集団のばあい、大人の側からの正しい論理を通してやらないと、本来ならば集団が集団としてプラスになるべき特性がすべて裏がえしとなることもありうる。協力的、友好的関係、精神的自立、個性の発揮としてあるべきが、画一的な人格、集中力不足、衝動的行為、無気力、ケンカなどとなってあらわれることもある。……(以下略)」と。

本調査の結果では3歳未満児の集団保育がよいものを生み出している部分もあることが明らかとなった。しかし上述のようなマイナスの危険も含んだ状況をいかに克服していくか、年少児保育の今後の課題をまとめると、

- (1) 3歳未満の年少児のばあい、保育の形態を特別考慮すべきである。つまりこまぎれのカ

リキュラムによる一斉保育ではなく、子どもひとりひとりの個性にあった成長を保障するような自由保育を基本としたい。

(2) 十分な保母数が必要。佐々木のいう3歳未満児のばあい、せめて3人に1人の保母がほしい、という提案を支持するものである。とくに3歳未満児の成長からいって協同で遊べる人数は2～3人である。それもこの数は適切な大人の介入があつての可能な人数であろう。

(3) 時間の制限と、同じ空間に束縛されがちな子どもを解放するために園外保育、野外保育を多くしたい。そこでは子どもひとりひとりの好きな活動が比較的自由にやれるであろう。それは保育所児の運動、探索・操作の面での発達の遅れをとりもどすことをも保障するものと考えられる。

(4) 人間性豊かな保母による保育。そのためには2年間というおざなりな保育養成機関のあり方、給与、研修時間の確保など、検討されねばならない問題が多い。

VI おわりに

本調査だけでは年少児の集団保育のあり方が充分にあきらかにされたとはいえない。本研究に残された問題点を以下に列挙すると、

(1) 質問項目としてとりあげるべき範囲の問題がある。本調査では0歳～3歳の精神発達の質問項目に限った。しかし3歳以後の発達項目も調査することによって年少児集団保育児の発達をより明らかにできたと考えられる。

(2) 対象児の数が少ないこと。筆者の調査能力の制約から統計的調査に耐えるだけのものできなかったことは残念である。

(3) 精神発達質問紙の限界。本調査に使用した0～3歳用の質問紙は主に、家庭保育児を中心に作られたため、集団保育を受けている子どもたちにそのまま適用して、その発達を比較することに不適切感が残った。つまり集団保育の子どもは、友だち関係が比較的発達すると考えられるが、それらを必ずしもはかりえていないこと。

最後に、本研究は望ましい年少児保育のあり方を模索するための現状分析であり、とくに年少児の集団保育が質的にも量的にも改善されるための第一歩となるべく、今後の研究を続けていきたいと願っている。

引用・参考文献

- 1) 「子ども白書」：日本子どもを守る会編，1972年，1974年，1975年。
- 2) J. Bowlby：「Maternal Care and Mental Health」W. H. O. Monograph Series No.2, 1952. ボウルビー（黒田実郎訳）：「乳幼児の精神発達」岩崎書店 1952.
- 3) 松島富之助：「チェコスロバキアの乳児施設の現状」『乳児保育』1957. 5.
- 4) 守屋光雄：「保育心理学」誠信書房 1965.
：「発達心理学」朝倉書房 1964.
：「保育原論」朝倉書房 1976.
- 5) 近藤薫樹：「集団保育とこころの達」新日本新書 1969.
- 6) 秋田美子（編）：「1～2歳児の保育」フレーベル館 1964.
- 7) 金田利子：「乳幼児保育論」有斐閣 1974.
- 8) 清水民子：「乳幼児保育の基本構造」大阪千代田短期大学研究紀要 1969.
- 9) 津守 真，稲毛教子：「乳幼児精神発達診断法」0～3歳まで，大日本図書 1965.

- 10) 佐々木保行, 佐々木宏子, 秋葉英則: 「児童発達心理学」—新しい日本の子どもたちのために, 高文堂出版 1976.
- 11) ヴィゴツキー (柴田訳): 「思考と言語 上・下」明治図書 1962.
- 12) 松田道雄: 「わたくしの保育指針」新評論 1972.
- 13) 土方康夫: 「これからの乳児保育」風媒社 1970.
- 14) 穴戸健夫: 「日本の集団保育」博文社 1967.
- 15) クブリアノーワ (山本・森下訳) 「集団乳児保育の実際」新読書社 1967.
- 16) ロシア共和国教育省 (坂本訳) 「三歳児までの保育」新読書社 1967.